

岸氏等は、大正九年に、石川縣の機業が窮地に陥つた。其の時、其の善後策を永井柳太郎氏に問ふた。之に對して、永井氏は、

『俺は直接織物のことは知らぬが……』

と前提して、獨逸のカルテルや亞米利加のトラストの事を語り、然る後、

『これからの世の中は、總べて組織の力を以てやらなければならぬ。個人機業が大資本を擁する工場と丸腰で戦つた處で、到底勝てるものでない。合して一團となり共同の力を以て當るべし』と云つた。岸氏等は、此の忠告を深く感じた。そこで、富士絹の計畫が圖に當るや、永井氏の忠告を實行するのは、此の秋と思ひ、組合を組織したのであつた。

其の組合は、マルサン富士絹組合と名づけた。當時、關係工場二十五、所屬織機千三百臺、それを合して、一團としたのである。組合の代表者は、岸、松島の兩氏であつた。そして、共同して原料の仕入を行ひ、共同して製品の販賣を営み、小企業と大企業の特長を併せ發揮して、良品廉賣の理想を實現した、さうしたら、賣行きが鼠算的に増加した。昭和四年四月には月産六萬數千疋に達し、本邦富士絹全産額の五割を占めるに至つた。

處が、それが全盛の頂點であつた。其の頃から世界的の不景氣が襲來し、海外の賣行きが減少し出した。そこへ持つて來て、鐘紡のやうな、綿絲紡績をやつて居る會社が、大規模に、富士絹をやり出した。これが世界的の不景氣以上の大敵であつた。

そこで、又第二の轉向が必要になつて來た。其の結果、人絹に着眼した。岸氏は海外狀況を視察に行つて來た。歸來、斷然、それをやる事に決意した。

そして、昭和四年十一月から、組合員の全織機の二割に、強制的に人絹を織らせた。當時は未だ人絹を危険視して居た時代だから、それは非常な英斷であつた。それだけに、反面の用意も必要であつた。

岸氏等は、其の時、組合資金を擧げて補助金に振替へた。それで損失を保證して、強制製織をやらせたのである。所謂背水の陣を敷いたのである。

斯う云ふ意氣込みだから、品質の吟味は嚴重にした。組合員を督勵して、飽くまで良品を製織させ、之にMA二千番の商標を附して、統一ある製品を賣出したのであつた。

此の計畫が又當つた。MA二千番は大に賣れ、數ヶ月で月産二萬疋を突破するに至つた。

組合統制と宗教の力

さて、人絹織物が當つて、是も非常に根據があるものとなつたので、其の後は市場の狀況に應じ、従來の富士絹と人絹とを、調節して、適宜製織する事にした。さうしたら各機業家の採算も非常に良くなつた。その爲めに、組合員も増加した。そこで、其の基礎を一層堅くする爲めに、昭和六年三月に、法律の保證する工業組合に改めた。

そして、名稱もマルサン織物工場組合とした。

製品は、其の後富士絹が衰へて、人絹がそれに代つた。今日の製品は、其の九割迄が人絹である。そして、其の輸出は、全産額の八割である。組合員百十三名、所屬織機千臺、一ヶ月の産額十萬疋、此の金額百萬圓、年計一千二百萬圓である。

製品は漸次高級織物に變つて行く傾向を持つて居る。それは、組合員首腦部の指導に因るものである。小企業の悩みは、如何にして大企業に對抗するかである。石川縣の機業家は組合を作りそれに依つて、出来るだけ小企業の缺點を補つては居るが、完全でない。そこで、更に、製織技

術の向上で、大企業を凌がりと考へたのである。

大企業は、機械の利用が巧みであるが、個人的技術は充分でない。其處に乗すべき隙がある。マルサン組合の首腦部は、それに着眼したのである。

人絹織物も、富士絹と同じく、躓て又大企業の壓迫を受けるに相違ない。それに打ち勝つには個人的技術の向上を圖るより外ないと云ふので、高級織物への轉向を奨励し出したのである。

私達は、岸、松島の兩氏から説明を聞いた後、兩氏の案内で、四、五の工場を見學した。

實に能く組合的の施設と訓練が行届いて居る。原料の買入、製品の販賣は勿論、組合員の指導啓發にも五、六人の専門技師を置いてある。組合員も亦能く首腦部の統制に服して居る。蓋し、組合として、理想的の發達をして居るものであらう。

私達は、組合首腦部が能く時勢の變化を凌ぎ、今日の盛大を致した其の勞を多とした。さうしたら、

「イヤ、それは全く時勢のお蔭です」と、謙遜の挨拶であつた。

是が何で時勢のお蔭であらう。時勢は却つて石川縣の織物に禍して居る。それも一度だけな

く、二度までも……。それを凌いで、今日の盛大を致したのだから、全く人の力である。

是で見ると、我が町などは辛抱が足りなかつた。私の伯父は染物屋にしても、苦しい處を凌いで、工夫をしたら、どうにか更生の道はあつたであらう。現に、我が町の染物屋は、絞りを産出して居た。絞りは今尙廣く用ひられて居る。そして、それは單に木綿だけではない。絹にも絞りが用ひられて居る。木綿から絹に發展し、そして技術を磨いたならば、今日相當な事業になつて居たであらう。

見附にせよ、加茂にせよ、又金澤にせよ、何處だつて、一本調子に經過して居ない。一本調子處か波瀾重疊である。それを乗切つて、今日に至つたのだ。我が町も之を學ばねばならぬ。過ぎた事は、過ぎた事として、今度人絹織物を始めたならば、飽くまで辛抱して行く事が、肝腎だと思つた。

岸氏に組合統制の秘訣を問ふたら、それは到底理窟だけでは駄目だ。信仰の力も藉らねばならぬと云つた。

それは至極尤もな事だと思つた。金澤では、何處の工場へ行つても、食堂の入口には、食事作法といふものが貼つてあつた。

(一) 入口一禮 (二) 合掌 (三) 食事 (四) 合掌 (五) 食器整理 (六) 出口一禮
と云つたやうなものだ。

私も子供の時、母親から、食事に對して感謝の意を表する事を教へられた。各工場の食事作法を見て、私は昔の母の教へを思ひ出した。母は佛教信者であつた。右の食事作法も佛教から出て居るやうである。

人間は物質だけではいけない。精神生活も必要である。組合統制に宗教の力を藉る事は、單に統制だけの利益でなく、其餘光が組合員の個人生活に及び、間接利益も多大であるに相違ない。私は此の點にもマルサン組合のやり方に感心した。我々一行は、岸、松島兩氏に厚く禮を述べて此の見學を終つた。

昭和十六年八月二十日印刷
昭和十六年八月二十八日發行

檢 印

石山賢吉文集 5

紡織工場見學記

定價五十錢

著作者

石山賢吉

發行者

石山皆男
東京市麩町區霞ヶ關三ノ三

印刷所

ダイヤモンド社印刷部
東京市麩町區霞ヶ關三ノ三

發行所

經濟雜誌
ダイヤモンド社

(出版文化協會會員番號一六五一〇號)

東京市麩町區霞ヶ關三ノ三

電話銀座四一五五・振替東京二五九七六

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

918
143

石山賢吉文集 第一期刊行

1	私の雑誌経営	(目次) 創刊前—發刊—最初の離隔—一周年—經營新案—伊藤監修—通信發行—體裁變更—本社新案—副業—震災—震災後記—雜誌の復活—事業會社
2	我が郷土	(目次) 立直る町—新潟から佐渡へ—工業都市としての新潟—新潟縣の新興工業—人絹織物瞥見—今日の新潟縣
3	上海紀行	(目次) 上海紀行—名古屋の一日
4	近代の事業家	(目次) 昭和の五人男—事業家の型—事業家について
5	紡織工場見學記	(目次) 若き紡績王に導かれて—倉敷絹織—愛知織物—豊田式織機—豊田自動織機—鐘淵紡績—大日本紡績—人絹織物
6	庄川問題(上)	(目次) 緒言—長良川事件—木曾川事件—益田川事件—庄川水電—飛州木材—行政訴訟—加越鐵道問題—乾の後援—仲裁—反對運動
7	庄川問題(下)	(目次) 形勢轉換—假處分—暴政—流材—双方の主張—實地檢證—木材廢棄—第二回の流材—結言

—以下續刊—

賣分由自・錢十五各價・頁百二均平卷各・製並版六A

終



十五價定
格現準標本日